

青年の親準備性に関する研究

岩 田 崇 (慶応義塾大学)
秋 山 泰 子 (")
吉 田 勝 (")
白 川 佳代子 (")
黒 川 由美子 (")
井 上 義 朗 (東京学芸大学)
深 谷 和 子 (")
近 藤 俊 之 (厚生省保険局医事課)

研究目的

子どもにとって家族は、選択の余地なく宿命的に与えられる集団である。そこで彼らは、後日の人間形成に決定的とも言える影響を心身発達上に受ける。しかし、子どもにとってこのように重要な環境である家族は、今日その中に多くの問題をかかえている。急速に進行しつつある核家族化の中で、母親は育児の自信を失い、父親の権威も喪失し、共働きの問題などから、子どものしつけも十分に果せず、家族の絆が次第に失われ、種々の社会的未熟児を生み出しているのが現代家族の姿とも言えるだろう。

本研究は、今日の若い世代における母性・父性の形成上の問題点の一端を明らかにするために、彼らが数年後に関わる「親」の役割を適切に果たすためのレディネス(親準備性)を、現在どの程度形成しつつあるか、sexualityをも含めて、広義の受胎前育児学の立場から可能な限り調査的接近を試みようとしたものである。

本調査では、これらのうち①異性親・結婚観②性役割観③子どもの受け入れに関わる態度④育児観⑤育児上の知識など、知識や態度的側面に限って取り扱っている。

調査対象及び方法

調査対象は、入試の難しさで知られる社会系単科大学のH大学、明治以来の名門私立であるK大学、カソリック系の名門女子大学であるS女子大学、東京にある国立の教員養成大学であるG大学の1年生から4年生まで、計1,462名である。その意味で、本サンプルの示すデータは、現代の大

学生の中でもとくべつに選ばれた層の若者たちの意識と行動ということになるだろう。なお、調査実施時期は、昭和56年2月～5月で、学校通しによる質問紙調査が行われた(表1)。

結 果

i) 青年の性

親準備性の問題を考えるにあたって、現在の青年の性行動を切り離して考えることはできない。そこで、まず、彼らの社会・性的行動(socio-sexual behavior)の実際面をとらえてみた。

まず第一に、数年後には結婚し親となる年齢にある彼らの中で、現在相思相愛の相手のいる者はどのくらいの割合なのか。結果は図1のとおり、入学直後に2割前後であったものが、女子は2年生で、男子は4年生で急増し、4年時には男子41%、女子45%の大きな割合に達している。

次に、異性との接触状況の中から、性交渉の体験についての結果を表2に掲げた。体験の1度もないものは、1年生では男子89%、女子91%であるが、これが4年生では男子50%、女子64%と著しく減少する。このように、大学生というこの時期は、対異性行動が活発で、かつ多様化してくる時期であることがわかる。また、男女差が思ったより少ない点では、女子の性行動の積極化傾向もうかがうことができよう。

これらの実態とは別に、性交渉に対する意識はどうか。結果は表3のとおりで、男子においては、「好ましければ性交渉する」と答えた者は74%にものぼっているが、女子ではそれが、36%にとどまっている。妊娠・出産を主軸とする生殖行

為と、エンジョイメントを主軸とする性行為とを、それぞれ独立したものとしてとらえようとする現代の性意識の風潮が言われているが、このデータで見ると、男子と女子の間には、まだかなりの意識の開きが見出される。しかし、「婚約していても結婚まではSEXしない」とする女子が、わずか4.2%という数字は、かつての時代とくらべれば、大幅な意識の変化とあってよいだろう。すなわち、性意識や性行動は、昔と比べて、男子の方にやや消極性が増し、女子は逆に積極化する傾向としてとらえることができそうである。

ii) 青年の結婚観・育児観

次に、そうした現状をふまえた上で、彼らの数年後の姿である結婚や子育てについて、彼らがどのようにその生活を思い描いているのかを、性役割観を中心に見ていこう。

まず、結婚後の夫婦関係のパターンでは、表4のように、「夫がリードする」という伝統的なタイプは、男子29%、女子34%と想像より少なくしか支持されていない。そして、「妻リード型」こそ男子5%女子1%とわずかだが、「互いに頼りあう」または、「相互に独立した生き方をする」という、形の上では一方に片よらない近代的なタイプの夫婦像を望む者が大部分を占めているのが特徴的である。

しかし、結婚後の妻の生活については、表5に示したとおり、「ずっと仕事を持ち続けたい」と考える女子は、このサンプルのようなエリート大学生の場合ですら41%。男子はそれよりもはるかに少なく、共働きの妻を望む者は19%でしかない。その理由は主として、自分の手で子どもを育てたいという意識が濃厚なためと思われる。それは、表6に示した結果からもよみとれる。これは、仕事と育児のどちらを優先させるかを、

「女性がTV局のディレクターや教師などの専門的職業に従事している場合」を想定させて答えさせた結果であるが、このような場合でも、男子の67%は、妻に仕事をやめるよう要求すると答えている。女子にしても、「育児を優先させ仕事をやめる」と答える者が40%もいる。また、共働きを続けるにしろ、子どもを保育所にあずけることを積極的に支持するのはわずかで、「赤ん坊の祖父母に育ててほしい」と考える者は男子26%

女子51%と、肉親依存傾向の強さを示している。

これらの結果の背後にあるのは、「子どもを誰が育てるか」という問題であろう。昔と比べて社会構造は大きく変化し、人々の意識も行動様式も大きく変わってきている。しかし、困ったことに、ヒトの赤ん坊は50年前、100年前と全く同じ無力な状態で生まれてくる。この、か弱く保護を要する赤ん坊を誰がどうやって育てるのか。保育所のような集団保育のシステムが増加しつつあるが、このシステムについては、マターナルデprivation (maternal deprivation) 論争も、まだ決着がついていない(科学的なデータが不足している)し、何よりも、こうしたある意味では知的エリートとみなしてよい青年たちの間にさえその意識が今一つついていけない部分があることに、留意しなければならないだろう。

さて以上のような問題をふまえた上で、次に彼らの将来の家庭において、だれがどのように育児を担当するつもりでいるかを明らかにしてみたのが、表7である。現代の職業として最も多いタイプである「サラリーマン」を例にして、夫が在宅の時に、どのように育児の役割分担をするつもりか、たずねた結果は、どの項目についても、「夫がたいていする」「夫がわりとする」と答えた者の割合は比較的少い。中でもいちばん夫によって分担されそうなのは「赤ん坊を入浴させる」で、男子の40%、女子の59%が、そう答えている。しかし他の項目はほとんどが「夫はほとんどしないか、または、妻が忙しい時に限って手伝う」と、彼らの構えは、性役割の果し方も伝統的な考え方の同一線上にあるようである。このような、子育ては母親の仕事という考え方が、共働きへの意識などと関連しているのであろう。

最後に、彼らの描く結婚生活において、子どもがどのくらいの重みを持っているかを見るために、「相手とどうしても性格があわないと思うようになった時」の離婚の可能性をたずねてみた。「子どもがいない場合」と「幼稚園児ぐらいの子どもがいる場合」の結果を併わせて作表したものが表8であるが、「子どもがいれば離婚しない」と答えた者は、「子どもがいても離婚する」という者を大きく上まわっている。現代においても、子はかすがいということわざは、まだ十分生きている

ことがわかる。

iii) 障害児の受け入れ

親準備性、また父性や母性という概念が成立するとして、それが一番顕著に発揮されるのは、わが子がふつうよりも保護を要し、人手のいる状態で生まれてきたとき、それをどのくらい能動的主体的に受け入れようとするかに表れるのではないだろうか。

そうした仮定のもとで、何らかの方法で先天異常に対する胎児診断ができた場合、その利用(と活用)をするかどうかの意識をたずねてみた。結果は表9に示したとおり、「使わない」と答える者は全体の20~25%であり、多くの者は、目的は何にせよその方法を利用したいと答えている。特に、「産むか中絶するか決めるために使いたい」と答える者が50%弱もいることは、やはり、現代の青年たちの間に生命軽視、または、胎児をまだヒトではなく1つの物体としか考えないような構えがあることを明示しているようにも思われる。むろんそれだけではなく、さらに、障害児をもつことへの不安感情と、養育に対しての十分でない構え、或は、他人から蔑視される感情等が交錯していることにもよると思われる。また、「障害に対応する心構えのために」利用したいと考える者が、男女とも3割程度存在することも見逃せない。しかし、このような観念は、倫理的、哲学的問題を含む難しい問題であり、この数字の示す内容については、更に考察が必要であろう。

次には、もっと直接的に、「もし心身に重度の障害のある子どもがあなたに生まれたら」という仮定で、自分の手許で育てるか、施設にあずけるかをたずねてみた。結果は表10のとおり、「あらゆる努力をして親である自分の手許で育てたい」と答えた者は、それほど多くない。全面的な施設入所を希望する者はさすがわずかだが、「通園施設に通わせる」というのが「自分の手許で」という者より多く、特に、男子より女子が顕著である。これらのことから、青年たちの親準備性が希薄であるとは一概に言い切れないであろうし、また、設問自体が仮定のものであり、障害児をもつことへの実感がなくともあるだろうが、自分の生きがい強く求める現代女性心情の一端が、ここに表れているとみなすことができよう。

また、表11は、「親になった後で万に一つの確率でも、心身に障害をもった子どもや、重い病気をもった子どもが生まれる可能性があるものです。あなたはそうした問題について、高校や大学で、また本などで、どの位系統だった知識をお持ちですか」とたずねてみた結果である。自閉症、ちえ遅れ、染色体異常などについては、僅かながら理解度が高いが、全般的に非常に乏しい知識しかもちあわせていないようである。この調査対象は医科系を除いた大学生であるので、当然かもしれないが、全人的教育が重要視されている現在、親準備教育の観点からも、受胎前育児学の立場からも、医学的知識の普及と教育、何らかのかたちでもっと十分に、現代青年になされる必要があるのではないだろうか。この数字は、単に、障害児の受け入れのみならず、子どもを心身ともに健やかに育てる、といった親準備教育の欠如を示すデータであるともみなすことができよう。

むろんこうした科学的知識は、多ければ多いほどよいという性質のものではないであろう。子どもを受け入れる構えが不十分で、子どもとの間にアフェクショナル・ボンドが成立していなければまた親自身が子育てに十分な自信や希望をもっていなければ、多すぎる知識が、かえって育児に障害となる場合もむろん考えられよう。すなわち親準備性とは、親としての知情意のバランスのもとに、はじめて成りたつものだとも言えそうである。

そうした意味で、全人的な親準備教育の必要が今後ますます高まって行くだろう。その社会的な要請にどう答えるかが、われわれの大きな課題であるとも言えそうである。

要約と結論

これから親になろうとしている青年たちの間に親の役割を適切にかつ十分に果しうだけのレディネスが成立しているかどうかは、ある意味で重大な問題だとも言えよう。これから生れて来る次世代の運命にかかわるものだからである。

本研究は、青年の中でも知的エリートと名づけられるような層(大学生)に対して、主として、親の構えの形成状態を「親準備性」と名づけて、可能な限りアンケート調査により接近を試みたものである。(1462ケース)

主な結果は次の通りである。

(1) 両思いの相手のいる者の割合は、1年生から4年生の間に急増し、4年生では男子41%、女子45%が、すでに相手をもっている。

(2) 性意識や性行動は、男子と女子の間に差が見出されるものの、昔と比較すると、女子の積極化傾向が顕著である。これに対して男子の方が、かつての時代よりも、こうした側面では消極化しつつある気配も見られる。

(3) 将来彼らが作る予定の家族については伝統的な、夫リード型の家族のイメージは稀薄であり、「互いに頼りあう」「相互に独立した生き方をする」という近代的なタイプが、描かれている。

(4) しかし妻が職業を育児の間も持ちつづけるという構えは思ったより少く、男子でも19%女子ですら41%でしかない。また妻がとくにやめるのに惜しいような専門職についていると仮定させても、この数字はあまり大きくは動かない。

(5) その理由は「わが子は自分で育てたい」という意識が濃厚なためと思われる。やむをえない

共働らきの場合でも、子どもを保育所にあづけようとする構えは、きわめて薄く、せめて「子どもの祖父母に」とする肉親依存傾向が大きいようである。

(6) しかし育児に関しては、男子も女子も、たとえ妻が専業主婦であっても、忙がしければ帰宅した夫が協力して育児をする、との積極的な姿勢が見出される。

(7) また離婚について仮定させても、「子どもがいれば離婚しない」とする者の割合は、思ったより多い。

(8) 胎児や障害児に対する態度には、分析しきれない種々の構えがありそうである。

(9) 子どもの病気についての知識を例にとると本サンプルの場合でも、それはきわめて貧弱である。このような親準備性の不備は、おそらく他の面にも存在すると思われる。

(10) 最後に青年層への親準備性の必要と、今後の課題が指摘された。

表1. サンプル数

| | |
|----|-------|
| 1年 | 167 |
| 2年 | 397 |
| 3年 | 675 |
| 4年 | 233 |
| 計 | 1,462 |

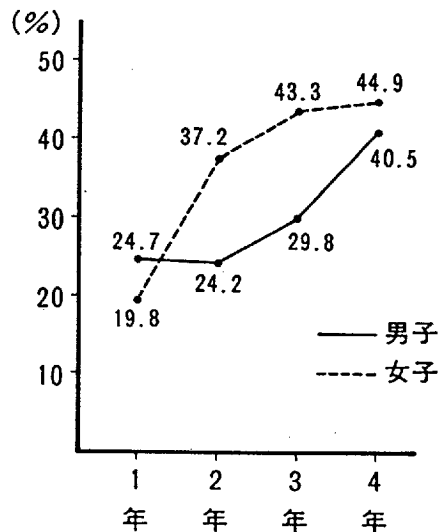


図1 好きな異性がいるか
両思い×学年

表2 性交渉の体験×学年

(%)

| | | 1年 | 4年 |
|----|--------|------|------|
| 男子 | 何度もある | 5.3 | 28.8 |
| | 4～5回ある | 2.7 | 7.2 |
| | 1～2回ある | 2.7 | 13.6 |
| | 1度もない | 89.3 | 50.4 |
| 女子 | 何度もある | 1.1 | 22.7 |
| | 4～5回ある | 2.2 | 5.7 |
| | 1～2回ある | 5.6 | 8.0 |
| | 1度もない | 91.0 | 63.6 |

表3 性交渉に対する考え

(%)

| | 男子 | 女子 |
|----------------------|------|------|
| 好ましければSEXする | 74.4 | 35.9 |
| 婚約していればSEXする | 14.5 | 22.1 |
| (婚約していても)結婚まではSEXしない | 11.1 | 42.0 |

表4 どんな夫婦になりたいか

(%)

| | 夫リード | 互いに頼りあう | 妻リード | 独立した生き方 |
|----|------|---------|------|---------|
| 男子 | 28.9 | 43.8 | 5.0 | 22.3 |
| 女子 | 33.7 | 27.8 | 1.4 | 37.1 |

表5 結婚後の妻の生活

(%)

| | 結婚したら家庭に入る | 子どもが生まれるまで働く | 子育てを終えたらまた働く | ずっと仕事をもち続ける |
|----|------------|--------------|--------------|-------------|
| 男子 | 39.4 | 25.3 | 15.9 | 19.3 |
| 女子 | 19.2 | 16.9 | 22.5 | 41.4 |

表6 仕事と育児のどちらを優先させるか
妻がスペシャリストの場合

(%)

| | 男子 | 女子 |
|------------------------|------|------|
| 仕事をやめ自分の手で育ててほしい(育てたい) | 66.7 | 40.0 |
| どちらかの親にあずけて仕事を | 25.8 | 51.4 |
| 親よりも保育所にあずけて仕事を | 7.5 | 8.6 |

表7 夫の育児分担(将来の自分の家庭でどうしたいか)

(%)

| | | 夫がたいてい する | 夫がわりとす る | 妻が忙しい時 だけ夫がする | 夫はほとんど しない |
|-----------|----|--------------|-------------|------------------|---------------|
| ミルクを飲ます | 男子 | 2.1 | 26.4 | 54.2 | 17.3 |
| | 女子 | 1.4 | 28.6 | 54.8 | 15.1 |
| 入浴させる | 男子 | 4.6 | 35.2 | 46.4 | 13.9 |
| | 女子 | 10.9 | 48.3 | 32.8 | 7.9 |
| 抱いてねかす | 男子 | 1.5 | 20.8 | 51.4 | 26.3 |
| | 女子 | 1.5 | 25.2 | 54.6 | 18.6 |
| おむつをとりかえる | 男子 | 1.3 | 15.5 | 51.6 | 31.6 |
| | 女子 | 1.2 | 25.3 | 51.2 | 22.4 |

表8 離婚するか

(%)

| | 子どもがいても いなくても 離婚しない | 子どもがいれば 離婚しない | 子どもがいても 離婚する |
|----|---------------------------|------------------|-----------------|
| 男子 | 40.7 | 37.2 | 22.1 |
| 女子 | 30.9 | 44.9 | 24.2 |

表9 胎児の異常が弁別できる方法が開発
されたら利用するか

(%)

| | 男子 | 女子 |
|---------------------------|------|------|
| 産むか中絶するか決めるため に使いたい | 48.6 | 49.5 |
| 障害に対応する親の構えを作 るために使いたい | 26.1 | 30.4 |
| たぶん使わないだろう | 18.8 | 16.7 |
| 絶対使わないだろう | 6.5 | 3.5 |

表10 重度の障害児が生まれた場合
どうやって育てるか

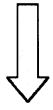
(%)

| | 男子 | 女子 |
|---------------|------|------|
| 努力をして手もとで育てたい | 40.9 | 24.4 |
| 通園の施設に通わせたい | 45.8 | 57.4 |
| よい施設に入れたい | 13.2 | 18.2 |

表11 病気についての知識

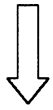
(%)

| | | 本やTVで 覚えたいくらい | 授業で少し | 何時間も 講義をうけた |
|------------|----|------------------|-------|----------------|
| 子どもの心臓病 | 男子 | 63.6 | 34.7 | 1.6 |
| | 女子 | 75.6 | 20.4 | 4.1 |
| 小児ぜんそく | 男子 | 56.9 | 37.9 | 5.2 |
| | 女子 | 70.5 | 24.1 | 5.5 |
| フェニールケトン尿症 | 男子 | 56.0 | 35.7 | 8.2 |
| | 女子 | 76.9 | 21.1 | 2.0 |
| ひきつけ | 男子 | 52.5 | 44.6 | 2.9 |
| | 女子 | 68.1 | 27.9 | 4.1 |
| 夜尿症 | 男子 | 50.6 | 42.3 | 7.1 |
| | 女子 | 67.3 | 29.1 | 3.6 |
| 小児マヒ | 男子 | 50.4 | 44.9 | 6.4 |
| | 女子 | 64.8 | 30.4 | 4.8 |
| てんかん | 男子 | 48.8 | 46.0 | 5.2 |
| | 女子 | 66.6 | 28.6 | 4.8 |
| 精神発達遅滞 | 男子 | 38.7 | 47.5 | 13.8 |
| | 女子 | 59.3 | 33.5 | 7.2 |
| 自閉症 | 男子 | 36.5 | 48.1 | 15.5 |
| | 女子 | 58.7 | 32.5 | 8.8 |
| 染色体異常 | 男子 | 33.2 | 49.3 | 17.6 |
| | 女子 | 60.2 | 32.1 | 7.7 |



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

子どもにとって家族は、選択の余地なく宿命的に与えられる集団である。そこで彼らは、後日の人間形成に決定的とも言える影響を心身発達上に受ける。しかし、子どもにとってこのように重要な環境である家族は、今日その中に多くの問題をかかえている。急速に進行しつつある核家族化の中で、母親は育児の自信を失い、父親の権威も喪失し、共働きの問題などから、子どものしつけも十分に果せず、家族の絆が次第に失われ、種々の社会的未熟児を生み出しているのが現代家族の姿とも言えるだろう。

本研究は、今日の若い世代における母性・父性の形成上の問題点の一端を明らかにするために、彼らが数年後に関わる「親」の役割を適切に果たすためのレディネス(親準備性)を、現在のどの程度形成しつつあるか、sexuality をも含めて、広義の受胎前育児学の立場から可能な限り調査的接近を試みようとしたものである。

本調査では、これらのうち 異性観・結婚観 性役割観 子どもの受け入れに関わる態度 育児観 育児上の知識など、知識や態度的側面に限って取り扱っている。